
零の軌跡 過去を追う者

黒丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零の軌跡 過去を追う者

【Nコード】

N8273X

【作者名】

黒丸

【あらすじ】

零の軌跡の2次創作です。

妄想が爆発したのでとりあえず書いてみました。

文章力零の駄文です！

オリ主、オリキャラ、オリ組織、ほかの漫画のキャラなども登場する予定・・・こういう設定無理な人は見なかったことにしてお戻りくださいm（　）m

子供時代1（前書き）

勢い任せて書いてしまいました！

作者は零の軌跡と、碧の軌跡しかプレイしていませんが
よろしくお願いします。

子供時代1

ゼムリア大陸西部 クロスベル自治州 西通り アパルメント
ベ
ルハイム

「行ってくるよ」

「行つてらっしゃい」

30代手前ぐらいの男性が出かける前に言うと、30代手前の美しい女性も笑顔で答えて、互いに近づきキスをした。

「朝からアツアツですねー」(ニヤニヤ)

「アツアツですねー」(ニコニコ)

すると二人の兄妹が壁から顔を出しニヤついていた。

「なっ!!・・・お前たち起きてたのか」

「あら、二人とも今日は早いのね」

男性は驚いていたが。女性は優しさ満点の笑顔だった。

「だって今日日曜学校だし」

「おにーちゃんが起きたから」

兄のほうが元気に答えると、妹は少し眠たげに答えた。

「おっ俺はもう行くな!」

「「「いつてらっしゃーい」」」

男性は、これ以上子供にからかわれるのは嫌だ、と言わんばかりのスピードで出つて行った。

それを見送った後で女性が。

「アキラ、ユナ、ごはんにしましょうか!」

「うん!」 「はーい」

兄のアキラは元気だったが、妹のユナは未だ少しねむたそうである。

「ごちそうさまでした。」

アキラは食べ終わるとすぐに日曜学校の準備をして玄関に立ち

「行ってきまーす！」

「行ってらっしゃーい」

母と妹に見送られてドアを出ると、すぐ隣の部屋のドアをノックして。

「ロイドー日曜学校行くぞー」

と大きな声で友達の名前を呼んだ

子供時代設定（前書き）

オリ主とその家族の紹介です

子供時代設定

オリ主

名前 アキラ・ヴォルケイノ

年齢 13才

身長 158?

体重 48kg

容姿 スパイラルの推理の絆の鳴海歩の髪をalice blueにして目の色を青に変えた感じです。

性格 ノリがよく困っている人は無視できない↑基本的にいい子

妹

名前 ユナ・ヴォルケイノ

年齢 6才

身長 120?

体重 16kg

容姿 Fate/Zeroのイリヤスフィールのまんまです

性格 優しい子で甘えん坊↑若干だった子

母

名前 ユリア・ヴォルケイノ

年齢 29才

身長 160?

体重 ??kg

容姿 Fate/Zeroのアイリスフィールのまんまです

性格 優しいく頑張りやだが怒ると修羅と化す

父

名前 アルヴァス・ヴォルケイノ

年齢 29才

身長 185?

体重 74kg

容姿 青髪、短髪で少し跳ねている 青い目をしていて爽やか系

性格 ノリがよくしょっちゅう子供にからかわれているが、仕事になると真面目に切り替わる

世間体? 周りとの関係

アキラとロイドは、同じ病院で同じ日に生まれたのがきっかけで、家族ぐるみの付き合いになる。(補足、ロイドの両親は亡くなっています)

ユナとユリアはよく、セシルやセシルの母を連れて買い物に出かけている。

アルヴァスは、捜査官で腐敗しきった警察のなかで、多大な功績を上げ市民から絶大な支持を受けている。またその圧倒的な捜査力から「千里眼のアルヴァス」と言われている

子供時代設定（後書き）

ヴォルケイノ・・・なんか語呂あまりよくないですねorz
それにアルヴアスの容姿だけ例えがないという・・・それに千里眼
って捜査力と関係ないじゃん・・・。
一通り後悔したので振り返らずに進みたいと思います。

子供時代2

『ガチャ』ドアの開く音とがして、ロイドが顔を出すと

「そんな大きな声出さなくても聞こえてるよ。少しぐらい近所迷惑
考えろよ」

「近所迷惑って、皆家族みたいなもんだし、いいじゃん」

アキラがそう答えると、ロイドが「はぁー」とため息を吐きだす
するとロイドの後ろから、かなりガタイのいい青年がでてきて。

「お前らどうした」

「あつ、ガイさん、大きな声出してロイドに叱られてたところです」
ガイの言葉にアキラが苦笑いを浮かべながら答える。

「ロイド、セシルのところもアキラのところも、家族みたいなもん
だしいいじゃねーか」

「はー、親しき仲にも礼儀ありだろ」

「あいからわらず、かたいなロイドは」

ガイがロイドを諭すように言うと、ロイドはすかさず言い返す。そ
れを聞いたガイは諦めたように言った。

「ロイドー、その話はまた今度にして、学校行こうぜ」

「誰のせいだよ。準備はできてるから、ちょっと待ってろ」

アキラの態度にツツコミをいれたロイドは、カバンを取りに部屋の
奥へとむかった。

「お前たちは、ほんと仲良いな」

「まぁーね。あつ、そうだ！今日学校終わったら、また稽古つけて
欲しいんだけど・・・いい？」

「ああ、今日はそんな忙しくならないと思うから、いいぞ」

「よっしゃ、やる気出た」

そんな会話をしていると

「準備できたぞ」

「おっ！なら行くか」

「俺もそろそろ行かないとな。」

ロイドがカバンを手に持ち出てきて、アキラが行こうとすると、ガイもそれに続く。

ベルハイムをでると、そこでガイと別れた。

「じゃ、気を付けてな」

ガイが言う

「にーちゃん、俺たち子供じゃないんだから」

「ロイド、俺たちまだ子供だぞ」

ロイドが言うが、すぐにアキラに否定された。

「いやいや、そういう意味じゃなくて」

「どういう意味だ？」

二人のやりとりを見てガイは笑いながら。

「そろそろ行かなくていいのか？」

「あっ」

二人の声が重なり

「「行ってきまーす」」

とガイにつけて走って行った。

「ほんと仲良しだな」

笑いながらガイが呟いた。

ベルハイム⇒クロスベル大聖堂

「意外と余裕あったな」

「だな、走る必要なかったかも」

ロイドの言葉に、アキラが苦笑いで答えると。

「おはようございます」

「「おはようございます」」

一人のシスターに挨拶されたので、元気に答える二人。

「元気がよくてなによりです。今日もよく学び教養を深めてください」

「「はい」」

シスターと挨拶を交わしてアキラとロイドは教室に入ってしまった
アキラとロイドが席に座ると。前には幼馴染のオスカーとウエン
デイが座っていた。

「「おはよう」」

「おーっす」「おはよう」

二人が声をかけると、オスカーとウエンディも振り返り返事をした。
その後。少し談笑していると、講師のシスター・マーブルが入っ
てきて、

「授業始めますよ」と優しく言った。

「アキラ君この問題を解いてみてください」

「へっ！ あっ、はい」

シスターマーブルに呼ばれて、驚きながらも黒板の前に行き問題を
解いてみせた。

「よくできました。ですが、授業中にあまりぼーっとしてはダメ
ですよ」

「すいません、気をつけます」

「わかってくれれば、いいですよ」

シスターマールブルに注意を受け、軽く頭を下げるアキラに対し、優しく微笑、声をかけるマールブル。

そして授業は続き、とどろりなく終了した。

アキラが帰り支度をしていると。

「アキラが注意されるなんて珍しいな」

「そうね、オスカーならまだ分かるけど」 （ニヤニヤ）

「どういう意味だよ！」

「言葉のとうりよ」 （笑笑）

オスカーがアキラに声をかけると、ウェンディがオスカーをおちよくります。

「二人とも落ち着けよ」

ロイドが二人を止めに入るが

「なんだと機械オタク！」

「なによパンオタク！」

二人はさらにヒートアップし、ロイドがアキラに救いを求めるように見るが・・・

「なあ・・・そんなのどうでもいいから早く帰ろ」

その言葉を聞いた三人は。

「「「誰のせいだ（よ）」」」

「えっ俺が悪いの！?!?!」

とアキラは少しの理不尽を感じながらも、四人で仲良く帰って行った。

子供時代2（後書き）

次はガイとの稽古もといバトルです。
うまくかけるだろうか・・・

子供時代3（前書き）

戦闘は一瞬です。

内容が薄いですが、でも頑張りました！

子供時代3

クロスベル大聖堂帰宅途中

「さっきは聞けなかったけど、どうしてぼーっとしてたんだ？」

オスカーとウエンディと別れてから、ロイドがアキラに授業中のことを聞きだした。

「いやー、どうやってガイさんに一発いれるか考えてたんだよ」

「はぁ！？」

ロイドがアキラの発言に驚いていると。

「今日の朝、ガイさんに稽古つけて貰う約束してさ、今のところまだ一撃も入れてないからすこし悔しくてな」

「それでぼーっとしてたのか？」

「おう！！」

それを聞いたロイドはため息一つつき

「心配して損した」

「心配？なんで？」

ロイドの気持ちなぞするよしもない、アキラの頭には？マークがたくさん浮かんでいる。

「アキラ普段から授業中は真面目なのに、注意されてたからなんか悩みでもあるのかと思ったんだよ」

「ロイド・・・そこまで俺のことを、お前やっぱ良いやつだよ！これからもよろしくな」

と言いロイドの手をがっしりと握る。

「おっ・・・おう」

ロイドも軽く握りかえす。

「お前らもう学校終わったのか？」

ガイが現れたするとアキラが

「もしかしてガイさんもう仕事終わったの？」

「ああ予想以上に早く終わってな」

チャンスとばかりにアキラが。

「ならさっそく稽古つけてよ」

「ん、まあいいぞ」

ガイが了承すると

「すぐ得物取ってくるからまってー」

アキラがもうダッシュで家まで走って行った。

「あいつ元気だなー」

「にーちゃんに、今日こそ一発入れるって意気込んでたからな」

「そいつは楽しみだ」

ガイは、はっはっはと笑っていた。

西クロスベル街道

「ロイド審判任せた」

「了解」

アキラがロイドにお願いすると、ロイドもうなずきながら答える。

「ルールはいつもと同じ30分制限、アキラが俺に一発入れた時点で終了でいいな」

「おう！1分で決めてやる」

ガイがルールの確認をすると、アキラが自信満々で答える。

「では、始め！」

ロイドの開始の合図を聞くと、アキラは自分の得物である木刀の矛先をガイに向け、

突きの構えをとると。

すると、子供とは思えないスピードで疾走する。

ガイは、そのスピードに思わず驚きながら、トンフアーを縦に構え防御の姿勢をとり

「おいおい、それガキのだせるスピードじゃねーだろ」

ガイの口から思わず愚痴がこぼれる。

そして20メートルほどあった二人の距離は、一瞬で縮まりトンフアーと木刀がぶつかる瞬間、

アキラは木刀から手を放しスライディングでガイの股下を通りぬけると。

「なに！」

ガイが思わず驚きの声を上げる。そして、その勢いの間まガイの足首をしっかりと掴む。

普通の人に行えば勢いよく転ぶだろう、しかしガイの足はびくともしない。

アキラが、それを好都合と言わんばかりの笑顔を浮かべると。

『ダンッ』地面を強く蹴り、次の瞬間右足に渾身の力を込めて、ガイの後頭部に向けて蹴りを放つ。

しかし、『ゴン』と鈍い音が鳴りアキラが見てみると、トンフアーで防がれていた。

このままではまずいと、強引に身体の軌道をかえ着地するとガイから距離をとるために後方に跳んだ。

「お前何もんだよ！さすがにビビったぞ」

「ガイさんこそなんで避けれるんだよ！自信あったのに」

ガイが言うと、アキラが猛抗議を始めた。

「直観ってやつだ」

「この化け物め」

ガイがあっけらかんと答えると、アキラ忌々しそうに言う。

「その年でここまでできる、お前も十分化け物だよ」

「次は当てる！！」

ガイが軽く流すと、またアキラがガイに向かっていった。

稽古開始から30分後

「俺の勝ちだな」

「ゼーハアーゼーハアークソー・・・ハアー」

ガイが笑顔で言うのと、アキラは息が荒く地面に仰向けに倒れたまま
嘆く

「大丈夫かアキラ」

ロイドが心配してきた。

「もうダメ・・・おぶってくれ」

「そんな冗談言えるなら大丈夫だな」

アキラが助けを求めるが適当に流されガイが。

「二人ともそろそろ飯の時間だ帰るぞ」

「ああ」「へーい」

二人も返事をしてアキラはフラフラの状態で、家へと帰って行った。

子供時代4

港湾区

皆、用事があると誘いを断られたアキラが、

一人で暇を持て余して港湾区を散歩していると。

「うう…ぐすっ…っひ…ぐすっ」

泣いている女の子を見かけた。

「どうしたの？」

「うう…ポーチ落としちゃったの…：うわーん」（号泣）

アキラが声をかけると、女の子が我慢できずに泣き出してしまった。

「えっ！っちよっ！泣かないで一緒に探してあげるから」

「うっぐ…ほんと？」

女の子が上目づかいで見ってくる。

「ほっほんとだよ！どんなポーチなの？」

それを見ておもわず声が上ずった。

「うんとね「こらー！フランを泣かすな」っ！」「グオッ！」

ドン！ゴトゴト！ガン！

女の子が説明しようとしたところ、女の子とよく似た子が走ってきてアキラにとび蹴りをかました。

まともにくらったアキラは、鈍い声をあげあまりの威力に勢いよく地面を転がりベンチに頭がぶつかった。

「おねーちゃん、なにしてるの！？」

「大丈夫よフラン、おねーちゃんが守ってあげるから」

フランと呼ばれた女の子があまりの出来事に驚く、フランの疑問など聞かず、大丈夫だと手を握り落ち着かせようとする姉。

どうやら姉が勘違いしているのだと気付いたフランは。

「その人私のポーチ一緒に探そうとしてくれてただけだよ！」

「？…えっー！」

事実を知り驚く姉。

そしてゆっくり少年が跳んで行った方を見る。

そこにはピクリともしない少年が転がっていた。

姉はやってしまったと顔が焦りに染まり、

「大丈夫ですかー」

とダッシュで駆けて行った。

「あれ、ここは？」

「あっ目覚めた、大丈夫？痛くない？」

「すいませんでした」

二人に介抱されてすぐ目が覚めたアキラだが、周りの状況がよくわかっておらず困惑していると。

先ほどの女の子がすごく心配をしてきて、もう一人のよく似た女の子が突然頭を下げ謝ってきた。

「何が？どうしたの？」

アキラが何がかわかりませんと顔をかしげると、二人に先ほどの出来事を説明されて、思い出すと。

「本当にごめんなさい！」

「いいよ、幸い怪我もしなかったみたいだし、もう痛みもないし大丈夫だよ」

姉のほうがまた頭をさげ謝ってきたが、アキラが優しく笑い大丈夫と言うが

「でも」

と下を向いてしまう。

「気にしないでいいよ、それよりポーチは見つかったのかい？」

話の内容をポーチにかけると。

「あーあ！どうしよう？」

女の子がまたすこしシュンとしてしまった。

「暗くなると探しにくくなるし、早くさがそうか」

「いいの？」

「うん」

そして三人で探し始めた。

30分後

「あったよ！」

「「ほんと!？」」

アキラがポーチを発見すると姉妹の二人が声をそろえて言いながら、近づいてきた。

「このポーチだよね？」

ポーチを二人にみせると。

「うん！ありがとう」

「よかったねフラン」

「うん」

フランが笑顔でお礼をいい、姉も嬉しそうに笑っていた。

「これで解決だね、よかった よかった」

アキラがうんうんとうなずいていると。

「本当にありがとう：そういうえばあなた名前なんて言うの？」

フランがそういうと二人がはっとなり、まだ互いに名乗っていないことに気がついた。

「俺の名前はアキラ・ヴォルケイノだよ」

「私はノエル・シーカーです」

「私はフラン・シーカーだよ」

三人が軽い自己紹介をすると。

「アキラはよくこの辺に来るの？」

「たまに友達と釣りをしにくるよ、二人もよくここに来るのかい？」

「そうですね、家からもかなり近いので」

フランの疑問にアキラが応え、ノエルが敬語でいうと。

「ノエル、敬語使わなくていいよ」

「えっ・・・でも」

「年も近そうだし必要ないよ。二人ともいくつなの？」

アキラがきくとフランが

「私は12才だよ」

「私は13才で・・・だよ」

ノエルも答えようとして、思わず敬語が出そうになり言いなおした。

「俺は13だよ、ノエル同い年なんだから敬語はいらないし、フランもいいからね」

とアキラが優しく微笑むと。

「はい」 「：うん／／／」

フランとノエルがこたえると、ノエルの頬が少し赤くなっていた。

「ノエルどうかした？」

「なっなんでもないよ」

慌てて顔の前でてを振るノエル、それを見てアキラが顔をかしげていると。

「ねーねーアキラ、明日ってまた来るの？」

フランが突然言い出すと

「特に来る予定ないけど、どうかした」

「遊びたいなーて思ってた／／／」

「フッ、フラン！」

フランが顔を赤くしていると、ノエルがびっくりして名前を呼ぶ

「いいよ、遊び」

「ほんとー」

満面の笑顔に変わり

「じゃー明日は三人で遊ぼうね」

「うん」

「あたしも!？」

フランの提案にアキラはうなずきノエルは、自分も入っている事に驚ろくと。

「おねーちゃん嫌なの？」

「いやじゃないけど」

ノエルがアキラの顔を見る

「三人一緒のほうが楽しいよ」

「うん、分かった」

三人は遊ぶ約束をすると。

「明日13時にここで待ち合わせね」

「了解」

フランに返事をする。

「また明日」

と言いアキラがその場を離れて行く、すると

「「また明日ー」」

と二人が手を振ってきたので、アキラも手を振り返し帰って行った。

子供時代4（後書き）

駄文すぎて恐ろしい…早く本編までいきたい

子供時代5

港湾区 12…50

「二人とも、もう来てるかな？」

アキラが昨日遊ぶ約束をした待ち合わせ場所に着くと。

「もう来てたんだね、待たせちゃった？」

「私たちも今来たところだよ」

「全然待ってないよ」

ノエルとフランが先に来ていたので、アキラが少し申し訳なさそうに言う。

二人も丁度今来たところだったようで、たいした気にしていないようだった。

「それにまだ10分前だからむしろ早いぐらいだよ」

「そうだよ」

「ならよかったよ」

二人の言葉に少しほっとしたアキラ。

「そういえば今日は何して遊ぶの？」

気になったのでアキラが聞いてみると。

「特に決めてないんだよねー」

「フランあんたが誘ったんだから決めときなさいよ」

「あははは」

フランのてきとうぶりにノエルが呆れ、フランが空笑いしている。

「ならとりあえず街のなかてきとうに回ろうか」

「うん」

「なんかごめんね」

アキラが提案するとフランがうなずき、ノエルは少し申し訳なさそうにしている。

「気にしない、気にしない、ほら行こ」

「はい」「うん」

アキラの右にフラン、左にノエルという両手に花状態で歩き出した。

行政区

「図書館よろー」

「ん？ いいよ」

「いいけど、急にどうしたの？」

フランが突然図書館に行きたいと言いだしたので、ノエルがどうしたのか伺うと。

「なんだか本読みたくなっちゃって」

「めずらしいわね」

「たまにはそういう日もあるの！」

珍しく本を読みたいと言ったので、ノエルが素直に驚くと、フランが少しムスツとして

図書館に入って行ってしまった

「すねた??」

「たまにあるの」

アキラがノエルに聞いてみると、肯定的な答えがかえってきた。

「とりあえず中に入ろうか」

「うん」

市立図書館

二人が図書館に入るとすでにフランが本を読んでいた。

「何読んでるの?」

「マルクと深き森の魔女だよ」

「えっ!それって???あるやつじゃない、まさか・・・全部読むの?」

アキラがフランに聞くとそれを聞いていたノエルが嫌そうに尋ねる。

「全部は読まないよ、きりのいいところでやめるよ」

「ならよかった」

フランの言葉を聞き安心するノエル。

「そんなに長いのか?」

アキラが尋ねる

「全部読んだら最低でも2時間はかかるよ」

「それは…長いね」(汗)

二人が話している間に順調に本を読み進めるフランその姿を見たふたりは。

「俺たちも本読もうか」

「そうだね」

アキラが本を手に取り開いてみると前書きに。

【5分を制する者が人生を制する】

このあまりに大げさな前書きに心奪われたアキラは、その本を何度も読み返していた。

（5分を制する者が人生を制する……なんて深いんだ）
アキラが心の中で歓喜に沸いていると。

「やっと読み終わったー」

突然フランの声が聞こえ顔を向けると、先ほどの3冊あった本を読み終えたところだった。

「フラン読むの早いんだな、俺なんてまだ1冊だよ」

「それはアキラが遅すぎなんだよ」

「アキラ2時間もあって1冊はさすがに遅いと思うよ」

二人に遅いと言われたアキラだが、ノエルの言葉が疑問を生む。

「何回も読んでたからね……って2時間!!!!!!」

「そうだよ」

「途中声かけたんだけど全然反応しないし」

衝撃の事実を知ったアキラは。

「そうだったんだ、ごめんねノエル」

「気にしてないから大丈夫だよ」

「でもそんなに何回も読んだ本ってどれなの？」

「これだよ」

フランが気になったのか聞いてきたのでアキラが本を手渡す。

「余った五分の有効な使い方」

フランとノエルが声をそろえていると。

「でもこの本読んだおかげで2時間無駄にしたんだよね」

フランが言った瞬間アキラの中で何かが崩れ去っていった。

「ちょっとフラン！」

「えっあ…ごめんね」

すぐにアキラの状態を察したノエルがフランを注意すると、フランも気づいたようでアキラに謝る。

「いいよいいよ事実だもん」

そういうとアキラは少し落ち込んでイジイジしだす。

「ねえ、読書はここまですてはかの所行こうよ」

「そっそうだね！そうしよう」

「うん」

空気を変えるためノエルが図書館を出るといい、フランが焦りながら賛成すると、

アキラも小さくうなずいた

行政区⇒歓楽街⇒中央広場　百貨店　タイムズ

「おねーちゃんこの服かわいいよ」

「ほんと、フランによく似合ってるよ」

「……………」

現在タイムズ2階にて服を見ている二人と、少し退屈そうなアキラ。どうしてこうなったかというと、図書館をでて、歓楽街のアイス屋

で3人でアイスを食べた後、
フランが服を見たいと言ったので百貨店のタイムズにきたのだが。

「ねー、この服おねーちゃんに似合うんじゃない」

「えー派手じゃないかな」

「……………」

すでに服を見始めてから1時間たっているのに飽きる様子のない二人。

そして退屈そうにしているアキラに気づいたフランが。

「（おねーちゃん、アキラがなんだか退屈そうにしてるよ）」

「（ほんとだ、……ねーアキラの服選んでみようか）」

「（それいいねー、賛成）」

二人がこそこそ話していると。

「二人ともどうしたの？」

「アキラの服も見ようってフランと話してたの」

「そうだよ、ほらこっちこっち」

アキラの疑問に答えると、フランがアキラの手を握りひっぱりだす。

「えっ、いいよそんな」

「いいからいいから」

「遠慮しなーい」

アキラが断ろうとしたが反対の手もノエルに握られ、アキラのお着替えタイムが始まった。

そしてさらに1時間30分後

「アキラこっちも着てみてよ」

「後これもね」

「……………」

あれから大分時間がたったが飽きる様子のない二人。

「アキラってなんでも似合うよね」

「ほんとだよね、羨ましい」

「あっははは」

もう何回目になるか分からないこの着替えショー、ノエルとフランがアキラに羨ましそうに言うが、アキラは疲れて苦笑いを浮かべながら、近くにあった時計を見るとすでに6時を回っていた。

「もう6時過ぎだけど大丈夫なの？」

「えっ、うそーもうそんな時間なの！」

「お母さんも心配するしもう帰らなきゃ」

二人が帰ると言うので、アキラが

「なら送っていくよ」

と言うと。

「そんな悪いよー」

「近いし大丈夫だよ」

フランとノエルが遠慮して言うが。

「いいからいいから、素直に送られなさい」

「なんかアキラお父さんみたい」 (笑) 【補足・フランとノエルの

父は死んでいます】

「ほんとね」 (笑)

アキラの言葉に二人が笑いながら答える。

「ほら、いいからいくよ」

「はーい」

中央広場⇒東通り アパルメント アカシア荘前

「送ってくれてありがとう」

「いえいえ、これも紳士たる者の務めですから」

ノエルにお礼を言われて冗談めかして言うアキラ。

「なにそれー」 (笑)

「ふふふ」 (笑)

二人が笑っていると、アキラが思い出したように、

「あっ、そうだ来週俺と友達の誕生日パーティーあるんだけど、よかったです二人も来てくれない？」

と言うと。

「行ってもいいの？」

「えっ、でも迷惑じゃない？」

フランとノエルがそう聞くと。

「うん！迷惑じゃないよ、二人には是非来てもらいたいんだ、俺の友達も紹介したいし……ダメかな？」

最初きてきと目をキラキラさせていたアキラだが、最後のほうになると声が小さくなり少しシュンとしてしまう。

「絶対行くよ！ねっ、おねーちゃん」

「うん、絶対行く」 (シュンとしてるアキラ可愛いな／＼／＼)

フランがノエルに確認するとノエルも別の事を考えながらこたえた。

「よかった、詳しい時内容決まったらまたおしえるね」
「うん」

二人が返事をして。

「またね」

アキラが帰ろうとすると。

「ちょっとまって」

フランに呼ばれてので振り返ると『ちゅっ！』
いきなりフランがアキラの頬にキスをした。

「ちょっと、フラン!？」

「えへへ／＼／」

「……………」(ポカーン)

ノエルが驚きのあまりフランの名前を呼ぶと、フランは頬を赤く染め照れている、アキラは驚きすぎて意識が少し飛んでいる。

「今日1日付きあってくれたお礼……迷惑だったかな？」

フランが少し上目づかいできくと。

「よっよろいしんじゃないでしょうか」(焦り)

アキラは動揺のあまり口が回らず、言動も少しおかしくなっている。

「えへへ、よかった／＼／」

そんな二人の様子をみたノエルが口をパクパクさせていると。

『ガチャ』

急にアカシア荘の扉が開き。

「ノエルにフランも帰ってきてたのね」

二人の母親がでてきた。

「おかーさんどうしたの？」

「あっ、おかーさんただいま」

ノエルが母親に尋ねると

「そこから二人の声が聞こえたから見に来たのよ、あらそちらの子はアキラ君でいいのかしら？」

「そうだよ」

「うん」

母の疑問に答える二人。

「初めましてアキラ・ヴォルケイノといいます、どうして僕のことを？」

「私は二人の母のクラリスよ、フランとノエルから昨日たくさんあなたの事聞かされたのよ」

お互いに自己紹介を終えると、ふふふと笑うクラリス。

「もーおかーさんそんなこと言わなくてもいいじゃない」

「そうだよー」

クラリスの小さな暴露に文句を言うノエルとフラン。

「あらごめんなさい、つい口が滑ってしまったわね」

クラリスの言葉にもーと文句を言う二人、それを見てアキラがはははと笑っていると。

「今日は二人と遊んでくれてありがと、よかったらごはん食べていかなーい？」

「いえこちらでも楽しかったので、それに今日はもう遅いですし母にも心配かけるといけないので帰ります」

クラリスがお礼を言い食事に誘うが、アキラはやんわりと断る。

「そうね、でも今度食べに来てね腕によりをかけて作るから」

「はい、是非お願いします。それではしつれいします。ノエルとフランもまたね」

「「またねー」」

クラリスにペコリと頭をさげ二人にも別れをつげ軽く手を振り帰って行った。

この時アキラは知るよしもなかった、数時間後に自分の運慶が大きく変わることを。

子供時代5（後書き）

後1～2話で子供時代終わります。

子供時代6（前書き）

報告ー今回はグロ要素が含まれます。

子供時代6

西通り アパルメント ベルハイム 7時

「ただいまー」

「あら、お帰り」

「おかえりー！」 『ガバツ！』

フランとノエルの二人と遊び終えたアキラが帰ってくると、ユリアとユナが出迎え、ユナはアキラに跳び付いた。

「おう、ただいまユナ」

「おにちゃん、ご飯にするお風呂にするそれとも…わ・た・「かーさん、父さんはまだ？」」

ユナが何か言い出したがアキラは無視してユリアに話しかけた。

「ええ、まだよ…先にご飯食べちゃう？」

「無視しないでよー」

「父さん帰ってきてからでいいよ、ユナもそれでいいか？」

ユリアの言葉を聞いてアキラがユナに聞こうとするが

「無視すんなー」 『ポカポカ』

「ごめんユナもう無視しないから、たたくのやめて」

アキラの言葉など聞かずにたたきだしたユナにアキラが謝ると。

「ほんとー、もう無視しない」

「しないしない」

「むーならゆるしてあげる」

しぶしぶ許すユナ、その光景を見ていたユリアはふふふと笑っていた。

「おにーちゃん今日は何してたの？」

「新しくできた友達と遊んでたんだよ、来週の誕生日パーティーに誘ったからその時ユナにも紹介するな」

アキラが誕生日パーティーに誘ったことを言う。

「もしかして…おんな？」

「えっ、そうだけど…どした」

「べっつにー」

ユナにジト目で見られ、少し焦りながらも尋ねると、顔をそらして少しだけ頬を膨らませていた。

9時

あれからユナのご機嫌とりを必死でやるアキラとそれを見て笑っているユリアすると。

「ただいま」

「「おかえりなさい」「」」

アルヴァスが帰って来たので、みんなで出迎える。

「御苦労さま、さー食事にしましょアキラもユナもあなたが帰ってくるのを待ってたのよ」

「そうなのか、ありがとなアキラ、ユナ」

「気にすんな」

「気にすんな」

ユリアがアルヴァスに言うと、二人にありがとうと言ったがアキラ

がため口で言うと、ユナも真似しだす。

「お前らなー……」

「ほらほら準備すぐできるから、みんな座って」

「だってさ父さん」 (笑)

「だってさ」 (ニコニコ)

「はあー」

二人の態度に自分の家庭内での威厳のなさに思わずため息を出すアルヴァス。

「ため息ついてると幸せ逃げるよ」 (笑)

「誰のせいだよ!!」

アキラにからかわられ、ツツコミをいれたアルヴァスが椅子に座ると、二人も座る。

「はい準備できたわ、みんな食べましょ」

「「はい」」

「おっうまそうだな」

ユリアの言葉に二人が返事をしアルヴァスは素直な感想をのべる。

「では、いただきます」

「「いただきます」」 『ゴトッ!』

アルヴァスが言うとはかの3人もつづいたが、すぐに食卓テーブルに何かが落ちた。

アキラがそのほうを見ると、そこには：ユリアの頭が落ちていた。そしてすぐユリアの身体を見ると、首から上がなくなっておりすぐ後ろには、全身黒づくめで顔に仮面を付けた人間が立っていた。

「っ！………」（な…何が…起きた！？）

「なっ何！！」

「…くっ」

アキラは驚きすぎて何もしゃべれず、ユナは突然のことに声をあげ、アルヴアスは黒ずくめの犯人に向かっていった。

普段なら武器を持っていない状態で、突貫などという愚かな行為を絶対にしないアルヴアスだが、今回は状況が違う。

自分が武器を取りに行けばその隙に子供が殺される、そして子供もをかばいながら戦うのも困難である。

だから彼は突貫という選択をえらんだ、相手の力量は未知数…ならば少しでもこちらが有利に動けるように、犯人が行動を起こす前に彼は動き出していた。

犯人にアルヴアスの拳が当たると思われたその瞬間、犯人が手に持っていた鏢のない黒塗りの刀を、下から上に振りぬくと『スパッ』という音とともに、アルヴアスの右腕が肘から切り落とされる。

「グアッ…」（太刀筋がみえないだ！）

アルヴアスが相手の力量に驚いていると、犯人はさらに振り上げた刀を振り下ろす。

「ア…ッア……クソ」

なんとか身体を右に傾け即死をまのがれたが、左肩から切り落とされた。

「ユナ」（守らなきゃ）

その光景を見て呆然とするユナを見たアキラはユナを自分の方に引っ張る。

そしてアキラがアルヴアスの方を見ると、アルヴアスの胸に刀が突き刺さっていた。

その刀を抜くとアルヴアスの身体が床に倒れ、犯人が刀についた血をはらう。

それを見たアキラは、すぐ横の棚の上にある花瓶を取り犯人を睨みながら投げつける。

だがそれは犯人の1メートルほど横を通りすぎる。

そして犯人がアキラとユナの方に歩こうとすると『ガッシャーン』とでかい音が鳴り、犯人がその方向を向き確認すると、窓ガラスが割れそのすぐ近くには花瓶の破片が散らばっていた。

犯人が後ろを向いてすぐ、アキラはテーブルの上に有ったナイフを手に取り犯人に跳びかかる。

しかし、それに気付いた犯人はアキラに強力な回し蹴りを食らわせる、

すると「ドン」と鈍い音をたて、アキラが壁に叩きつけられた。

「ぐっ、ゲホッゲホッ」

「ガキにしてなかなか良い策だったが…相手が悪かったな」

アキラが咳を吐き、壁に手を付きながら立つと犯人が初めて口を開いた。

「どうして…どうしてこんなことを」

「貴様がしる必要はない」

「……………」（まだだ…まだ時間をかせがなきゃ）

アキラが時間をかせぐために犯人に問うが、犯人はその言葉に冷たく答えアキラに近づく。

「誰に雇われた」（せめてユナだけでも守らなきゃ）

「……………」

アキラがまた犯人に問うが、今度は返事すらない。
殺されるアキラがそう思っていると、『ダッダッダ』とユナが走ってアキラと犯人の間に立ち、アキラを守るように

「ダメー」

と叫ぶが

「邪魔だ」

犯人がそういうと手に持っている刀を横に一閃する。
するとユリア同様ユナの頭も床に落ちた。

「ア…アツ…アー……」（なんでユナが…守ろうとしたのに…なんで…）

アキラが自分の頭を押さえ小さく嘆く。

だが犯人はそんなアキラを見ても止まる様子はない。

そして犯人が刀を振るおうとすると『ドン！ドン！ドン！』

「おいさっきの音はなんだ！、それに叫びごえも、おい！何があったんだ」

『ドン！ドン！ドン！』扉の向こうでガイが扉を激しく叩く。

「なっ！？」（ガキを殺すのに時間をかけすぎた）

それを聞いた犯人は自分の失態に気付き、すばやく刀を右肩から左わき腹を両断する勢いで振りぬく。

だが運がいいことにアキラが体制を崩すタイミングとかぶり、アキラの胸に深い傷を残すだけの結果となった。

「クソが」

苦渋がたつぷり籠った声をだしもう一度振りかぶろうとしたが『ドンッ！』という音がなり扉が蹴破られ部屋の中にガイが入って来てその後ろにはロイドもいた。

「なんだこりゃ！」

「なっ……」

ガイが部屋に入るとそこは血の海と化しており、ロイドはあまりの光景に言葉を失い目を見開いていた。

そしてガイが一人一人の状態を見ると「ガハッ」と聞こえ顔を受けると、まだ息をしているアキラを見つけ近寄ると。

「おいアキラ大丈夫か！？ いったい何があった？」

「アキラ！！」

「まも…れ…な…かった…ごめん…ユナ…」

ガイがアキラに聞こうとしロイドも駆け寄るが、アキラから聞いた言葉は死んでし

まった妹への謝罪だった。

それだけ言うとアキラは意識を失った。

子供時代6（後書き）

ユナ殺してしまった…だけどこれでアキラの心に深い傷ができたはず！

アルヴァスの活躍などはのちのち過去話的な感じで書こうと思います。

子供時代7

クロスベル市 どこかの部屋

9時30分

「まだか…まだか」

少しぼっちゃりした中年の男性が部屋の中を行ったり来たりしている。
と。

「おい」

「ひっ…おーあんたか待っていたよ。それで…どうなった？」
突然黒ずくめで顔に仮面をしている人があらわれた

「依頼は完了した」

「そうか、良くやってくれた！」

黒ずくめの言葉に中年男性は歓喜し机の引き出しを開け、なかから
分厚い封筒をとりだすと。

「これが約束の報酬だ」

中年男性が封筒を渡すと、黒ずくめは封筒の中身を確認する。

「…確かに受け取った」

「いやー今回は本当に助かったよ、またなにかあったらよろしく頼
むよ」

「機会があればな」

黒ずくめはそう言うのと空気に溶け込むように姿を消した。

「はあー…ほんとえたいのしれん奴だ…できればもう関わりたくな
いが…」

そう言うのと椅子に座り窓の外を眺めて。

「だが：今回だけは感謝せねばな」
その中年男性の顔には笑みが浮かんでいた。

10時30分

「あなたお客さんよ」

「誰だこんな時間に」

妻に言われ、若干苛立ちながら玄関に向かうと。

「○○○○課長大変ですアルヴァス捜査官とその家族が何者かに殺害され、息子さんが病院に搬送されました。」

「なっなんだと！」（病院に搬送ということだ!?!）

課長と呼ばれた男は別の意味で驚いていた。

「今さっき捜査一課の人間が現場に向かったとのことですよ」

「そっ、そうか：子供の様態はどうなのだ？」

「はい怪我は深かったのですが、すぐに発見されたので助かるだろうとのことですよ」

「そうか：無事なようですね」（くっどうする、奴にはもう報酬を渡してしまったし、連絡しても恐らく繋がらんだろう：連中に頼むしかないか）

「あの課長？」

急に黙る○○○○課長を見て声をかけると

「ん？あー、すまないな彼を失ったのがショックでね：子供だけでも守らんとな」（目覚める前に始末しなければ）

「そうですね：すぐに現場に向かいますか？」

部下が○○○○課長を確認するが。

「先に行っててくれ、病院に警備の者を手配したらすぐにむかう」
「了解しました」

〇〇〇〇課長がそう言うのと部下の男は走って行った。

クロスベル市 旧市街 アパルメント ロータスハイツ
10時50分

『コンコンコン』

ある一室の扉がノックされた。

「ロレン見て来てくれ」

「わかった」

20代後半ぐらいの赤髪の男性がそう言うと、その男性に良く似ているロレンと言われた20代半ばの男性が答える。

『ガチャ』扉を開くと誰もいない、代わりに一つの赤い封筒が置いてありそれを手に取り部屋の中にもどる。

「兄貴これ」

「ん？ ああそれか…2カ月ぶりぐらいか」

どうやら二人は兄弟でその封筒には見覚えがあるらしい。

「……………」（こいつは！）

「兄貴？」

「見てみる」

「なっ！！」

そこには病院の各階ごとの設計図と警備員の配置の書かれたマップと依頼内容、そして200万ミラが入っていた。

「今回はかなりでかい仕事らしいな」

「うけるのか？」

「200万ミラだぞ！受けるに決まってんだろ」

ロレンが少し心配そうに聞くが、アレン【兄】は即答する。

「大丈夫かよ？今回は警備隊の人間も配置されてるみたいだし、2人だと正直つらいぜ」

「お前は自信なさすぎだ、少しは自信を持て。行きたくないなら俺一人でも行くからな」

「ッ！：兄貴一人行かされるわけないだろ！……俺も行く」

アレンが一人でも行くといいしぶ行くと言うロレン。

「そうか、なら準備するぞ」

「ああ」

二人は依頼を完遂させるために準備に取り掛かった。

聖ウルスラ医療大学11時30分

「傷が深く危険な状態でしたが適切な応急処置がされていたので、早ければ明日には目が覚めるかと」

「「良かったー」」

「ありがとうございます先生」

先生の言葉に安堵するロイドとセシル。先生と呼ばれた医師にお礼を言うレイテ。

【ガイは捜査一課の人間に呼ばれ現場へ】

「いやいやセシル君の的確な応急処置がなければ厳しかったですよ、よくやってくれたセシル君」

「そっそんな私はただ必死で」

「はっはっは謙遜するんじゃない、君のおかげで彼は救われたようなものだよ」

謙遜するセシルを医師がさらにほめる。

「先生アキラはすぐ退院できるんですか」

「すぐには難しいね最低でも3周間は入院してもらわないと」

「そうですか」

ロイドが医師に聞くが、医師の言葉を聞いてシュンとしてしまう。

「無事で良かったじゃない」

「うん…そうだよ」

「もうかなり遅いし皆そろそろ帰りなさい、たしかもうすぐ最後のバスがでるはずだよ」

「そうね、二人ともまた明日来ましょ」

セシルがロイドを慰めると医師から帰るように言われ、二人とも複雑な表情をするが、

レイテが二人に提案すると二人ともあきらめたようにうなずき、いまだに少し落ちこんでいるロイドをセシルが慰めながら帰ると、レイテも後につづいて帰って行った。

聖ウルスラ医療大学手前の茂み

1時30分【AM】

「ロレン情報は頭にたたきこんだか？」

「大丈夫だよ、子供の部屋は301号室。警備隊は病院入口に二人2階の巡回が一人301号室に二人。」

「大丈夫そうだな…いくぞ」

ロレンの言葉を聞き少しほっとするアレン。

「了解、でもさ…正門に警備隊配置しないなんてバカだね、おかげで楽できるけど」

「だな、だが油断するなよ」

「うん」

最初楽できて嬉しそうにしていたロレンだったがアレンにくぎをさされ今度は真剣な顔で静かに頷く。

そして二人は正門からこっそり入ると、すぐに左に曲がる。

「ここだな」

アレンがそう言うと言と小さめのバックから先端にカギ爪のついたロープを取り出す。

『ヒュン カラン』壁の上にある手すりめがけて投げると夜にも関わらず一発で引っかける。

そして素早く上るとそれにロレンも続き上り終わるとロープを回収する。

「気のせいかな」

二人が声に気づき下を見ると、物音を聞いた警備員が今さっきまで二人がいたとこまで来ていた。

（これ程度の物音でもきづかれるか…）

アレンは考えるとロレンに急にハンドサインで指示をだす

（俺が先行するか…まあ兄貴なら大丈夫か）

ロレンが楽天的な考えをしていると、アレンが進みだす。

アレンがハンドサインをすると

（なんだ？兄貴が下？足を手の上に？跳べ？そしてバレーのレシーブのような構え…了解）

ハンドサインを確認すると、軽く助走をつけアレンに向かい跳ぶ、そして組んだ手の上に飛び乗ると、アレンは足を思いっきり上に投

げ飛ばす。

『タンッ』できるだけ音を立てないように着地するとすぐに下にいるアレンに手を伸ばし引き上げる。

そして下から見られないように姿勢を低くして進み、扉を静かに開閉中に潜入した。

聖ウルスラ医療大学301号室

1時30分

「ふぁーあ」（寝みー）

「ちょっと緊張感なさすぎでしょ！」（なんなのよこいつ）
茶髪の20才ぐらいの青年があくびをだすと同年ぐらいの金髪の女性に怒られる。

「しょうがねーじゃん寝みーんだもん。どうせだれも来やしねーよ」（まじこいつめんどくせー）

「あんたはどうしていつもそんなにてきとうなのよ」（ほんとイライラする）

青年のやる気のない態度にいらつく彼女。

「あのアルヴァスさんが殺られたのよ！なんでそんなにのんきでいられるのよ」（もうこいつ何考えてるの信じらんない）

「あんなおっさんのこと知るかよ…はぁー」（うぜー）

彼女は怒りをあらわにするが青年は適当にながすため息をつく。

「てかお前声でかすぎここは病院なんだから静かにしろよ」
『ブチ』

何かが切れる音がした比喻表現ではなく、実際に血管がきれたのではと彼女の方を見ると今の彼女は阿修羅もイチコロにできるのではと思うほどの素敵な笑顔を浮かべている。

（ヤバイ）（汗汗）

青年は危険を感じると。

「俺近く見回りに行ってくるわ、犯人いるかもしれないし」（早く逃げなきゃやられる）

「あっ！ちよつと」（後で覚えてなさい）

青年が出ていくのを確認すると「はあ」とため息をつき、彼女はアキラの方に近寄ると頭を優しくなで。

「アキラ君必ず守るからね」

そう言い彼女はアキラの頭をなで続けた。

聖ウルスラ医療大学

1時35分

「はーやってらんねー」なにがだい」っ誰だ？」

茶髪の青年が声の聞こえた方を向きながら銃を構えるとそこには赤髪の男性が立っていた。

「誰だと思う」

「ふざけているのか」

明らかにふざけた様子のアレンに苛立ち怒気を込めていると。

「そんなに怒らないでくれよ……殺したくなるじゃないか」

「貴様いったいなにもグッ」

「後ろにも気をつけないとだめだよ」

アキラが殺すと言うと危険度を上げ対処しようとした青年だったが、その瞬間急に後ろから何者かに首をロープで絞められ言葉を出せなくなる、すぐにロープをとこうとしたが…

「じゃーな」

アレンはそう言うのと、いつの間にか手に持っていたナイフで首を切り裂いた。

「すこし遊び過ぎたな…すぐ終わらせるぞ」

「ハンドサインはもういいのか？」

「必要以上に喋らなきゃな、それと部屋に近づいたらまた使う」

「了解」

1時40分

「あいつおそいわね」（まさかどこかでさぼってる…もしそうなら殺そう…うん）

青年が戻ってこないのもので頭の中で恐ろしいことを考え結論づける。

「いまごろ空いてる病室で寝てるかもね」

「もしそうなら二度と起きれなくしてやる…てっ誰!？」

彼女が声の聞こえた方を見ると窓に腰かけ彼女を頬笑みながら見ている金髪的美男子がいた。

（かっかこいい…って違う!）「あなた誰!?!まさかあなたがアルヴァスさんを」

「違うよ…それと私の名は『ドス』ジャック・ベザリウス」

ジャックは彼女に話しかけている最中に後ろに回り込み首に手刀を

落とし気絶させてから、自分の名前を名乗った。

『コッソ』

廊下から僅かだが足音が聞こえると、ジャックは彼女を抱きあげテーブルの下に隠すように寝かせ窓から外に出て行った。

ジャックが窓から出てから数秒後『コンコン』誰かが部屋をノックする。

だが反応はない、そして1分が過ぎたころ少しだけ扉が開かれ誰かがその隙間から中をうかがう、そして扉が開くとアレンとロレンが回りを警戒しながら入ってくる。

「どういうことだ情報ではもう一人いるとのことだが」

「そんなのいいからとっとと始末して帰ろう、長くいれば不利になるだけだ」

「そうだな」

アレンが警備が少ない事を不気味に思っていると、ロレンが早く帰ったそうに言いそれに賛同する。

アレンがアキラに銃を向け引き金を引こうとすると。

「君たちは誰に雇われたのかな」

「！…貴様何者だいつからそこにいた」

突然声をかけられその声の主に銃を向けいつでも撃てる状態にし問う。

「まさか君たちだけってことはないよね、黒幕はだれかな？」

銃を向けられても者ともせず、笑顔で質問してくるジャック。

「死ね」

アレンがかまってられないと銃の引き金をひこうとすると。

『ヒュン…ブシャブシャブシャ』

短い空気を切るような音がすると突如アレンの身体がバラバラに崩

れ落ちる

「兄貴：なにが」

ロレンが現状を理解できないでいると

「簡単だよ私が彼に近づいて切りつけたただだよ」

「お前何を言ってる：っ！！」

ジャックの言葉を聞き信じられないとロレンが彼の方を見ると驚愕する、先ほどまで何も持っていなかったジャックの手には、赤黒い鎌が握られていた。

「それで：兄貴を」

「そうだよ」

ロレンの言葉にニツコリ答えるジャック。

「よくも兄貴を：殺す！！」

「兄弟愛ってやつかい？いいねそういうの私も好きだよ」

ロレンも兄同様に銃を構え撃とうとするが『ヒュン』気付けば銃の先端が切り落とされ使い物にならなくなっていた。

『ヒュンヒュン』『カカン』

先ほどの光景をみてたいした驚きもせず銃をすて腰に差していたナイフを投擲するがそれもはじかれる。

はじかれただけならまだいいだがロレンには見えなかった、ジャックが鎌を振るう瞬間が、それどころか彼に動いた様子は一切なく先ほどの笑みを全くくずさない。

「：なんなんだよお前」

「言ってもいいんだけどね、まず私の質問に答えて貰おうか、君達を雇ったのは誰だい？」

ロレンが静かに言うジャックが先ほどと同じ質問をする。

「知らない」

「どういことだい」

ジャックが少し首を傾げるようなしぐさをする。

「お前に教えるぎりはない」

「しょうがない…このやり方はあまり好きじゃないのだけれど」

ロレンの言葉を聞き、諦めロレンの前に一瞬で近づく。彼の頭を掴む。

「ほんとに知らないみたいだね」

『バツ』

「何をした!？」

ジャックに頭を掴まれあわててその場から飛び退く。ロレンは問い詰めるように聞く。

「君の頭の中を見せて貰ったよ」

「そんなことができるわけねーだろ!」

ジャックの言葉を信じれないロレンすると。

「君の過去を話して信用してもらおうのも面白そうだけど、どうやら時間切れのようだ、それに私は君のような人間が嫌いだね…だから…さよならだ」

「な『スパン』」

ロレンはなにか言をうとしたが言いきる前に身体を縦に切れ床に落ちた。

「さてと」

そう言う。ジャックはアキラを抱き上げ窓の方に向かい、振り返り部屋を見渡す。

「警備隊は少年を守り切れず、犯人は少年を殺せず、今回は私の一人勝ちかな」

そういうとジャックは窓から飛び降りて行つた。

????? ジャックの部屋

11時30分【AM】

「ここは？」

「目が覚めたみたいだね、ここは私の部屋だよ」

アキラが目を覚ますと見をぼえのない光景に声をあげる、するとジャックが優しく声をかける。

「おにーさんだれ？」

「私の名前はジャック・ベザリウス、初めましてアキラ君」

「どうして俺の名前を？」

「君のお父さんと知り合いでね、君の名前も聞いていたのさ」

「父さん……うー……頭が……痛い」

ジャックに父のことを話されると突然頭痛に襲われるアキラ。

「まだ記憶が混乱しているんだね、ちょっと失礼するよ」

「えっ！」

アキラの頭にジャックが手を乗せると。

「あ……ああ……」（父さん母さんユナ……皆殺された……それにこれは？）
アキラの頭の中で家族が殺された時の状況が鮮明に思い出される、
そして警備隊に護衛され、二人組の人間に殺されかけていたこと、
ジャックが自分を助けたことなど、彼の意識のない間に起きたこと
もだいたい理解し、そしてジャックの能力も理解した。

アキラが目元に浮かんでいた涙がこぼれないように必死で抑えてい

ると。

「君は家族が殺されて悲しいかい？ 犯人が憎いかい？」

「…」（憎い犯人が憎い）

ジャックがアキラに問いかけると無言で頷く。

「そうか、なら私が君を鍛えてあげよう、君がもう悲しい思いをしなくて済むように」

「どうして…どうしてそこまでしてくれるんですか？」

ジャックの優しさに疑問をもつアキラ

「私は昔アルヴァスさんに救われたことがあってね、恩返しみたいなものだよ」

「父さんに…」

そしてジャックがアキラに手を伸ばす。

「アキラ私は君の力になりたい」

ジャックがそう言うと、アキラは寝たままジャックの手を握り

「お願いします」

「うん 今はゆっくり休みなさい、後でまた様子を見に来るから」
そう言うとジャックは部屋を出て行き、部屋にはアキラ一人になった。

（父さん…母さん…ユナ…俺頑張るから）

心の中で呟き、アキラは眠りについた。

彼が求めるものは事件の真相か…犯人への復讐か…それとも…。

子供時代7（後書き）

登場人物は夜でも目がよく見えるようです。

手すりとか相手の髪の色とかいろいろと…そういうことにしといてくださいお願いしますm（　）m

今回登場したジャック・ベザリウス（p a n d o r a h e a r t s）ですが、できるだけ口調を似せようと思いますが（性格は既に崩壊？）作者にそれだけの能力がないので、容姿のよく似た別人だと思ってください。

そして子供時代が終わり、次回から零の軌跡の本編なのですが、その前にアキラ（18才）やジャック・ベザリウス、オリ組織などの設定を投稿する予定です。

零の軌跡 設定（前書き）

名前 髪 目の○内のは変装時です

零の軌跡 設定

オリ主

名前 アキラ・ヴォルケイノ（ベザリウス）

年齢 18才

身長 178?

体重 65kg

容姿 スパイラル推理の絆、鳴海歩を大人ぽく。

髪 a l i c e b l u e（黒）

目 青（赤）

性格 優しい性格、任務中はクール&ドライ

所属 パンドラ（護衛組織）

階級 3番隊 隊長

装備

武器 雷電（刀） STR+550 SPD+10 クリティカル
率+15% 気絶+20%
雷を纏う刀、扱う者は雷の加護を受ける。

防具

身体 黒スーツ DEF+520 SPD+10 回避率+10%

靴 黒い皮靴 DEF+180 SPD+15 回避率+15%

アクセサリ 1 グラールロケット「全状態異常」無効化

アクセサリ 2 ルールフラグメ 全魔法無効化 味方の回復・補助魔法も受け付けない。

クラフト

牙狼 15 単体

切り下ろし切り上げの2段攻撃。敵のDEF-25

斑鳩^{イカルガ} 20 中円

一振りで八つの斬撃を飛ばす。

鬼門 15 自分

カウンター技（居合い）、攻撃を無効化し半径3マス以内に敵がいると通常の2倍の威力で反撃する。

雷切 30 直線

刀に雷を纏わせて突きを放つ。敵のSPD-25

雷桜 30 大円

周囲に雷をまき散らす 25パーセントで気絶

雷人化 30 自分（補助）

5ターンの間STR+200 DEF+200 SPD+50 M

OV+2 RING+1 回避率+50%

Sクラフト

雷切閃光 100~200 中円

雷切を連続していろんな角度から放つ。CP10で1回の雷切。200ある場合20発の雷切を放つ。

雷鳴招来 100~200 小円

雷を敵の頭上に落とす。

建御雷神 200 全体

??? 使用後3ターンの間雷人化。

詳細(14~18)

14才~15才 ジャックやその他大勢から修業を受ける。

15才~17才 1年間の修業を終えパンドラに入り任務を受け始める。

17才~18才 隊長に抜擢される。隊長になってからの初任務で村の護衛の際、猟兵団《黒の雫》を殲滅したことで《蒼い雷神》(纏っている雷の色が蒼色だったため)と呼ばれるようになる。

その他にも鉄血宰相、ロックスミス大統領、クローディア王太女などの護衛の経験あり。

18才~零の軌跡本編

オリ組織

名前 パンドラ（護衛組織） 創始者 ジャック・ベザリウス

依頼内容 国のトップや金持ちなどのVIPをメインに護衛などの任務をしている、場合によっては村などの護衛も引き受ける。

裏でやっている事 独自の情報機関があり各国に諜報員を放ち情報を集めている。

本当の目的 《身喰らう蛇》が企む巨大なプロジェクト、オルフェウス最終計画 の全貌説明と阻止。

設立 零の軌跡原作6年前にジャックによって作られた組織。

規模 1～6番隊まであり各部隊50名ぐらい。各部隊にも数名の諜報員がいる。

オリキャラ

名前 ジャック・ベザリウス（Pandora Hearts）

年齢 25歳

身長 180？

容姿 金髪・エメラルド色の瞳

性格 明るく女好き

階級 パンドラ総帥

仕事 依頼の確認。VIP主催のパーティーへの出席。女漁り？

武器 鎌 鎖 ???

名前 ギルバートⅡナイトレイ（PandoraHearts）

年齢 24歳

身長 182？

容姿 黒髪・黄色の瞳

性格 主に忠実 ヘタレ？

階級 総帥側近

仕事 ジャックの護衛及び監視（逃げないように）

武器 2丁拳銃

名前 ザークシーズⅡブレイク（PandoraHearts）

年齢 見た目24歳

身長 177.5？

容姿 白髪・赤色の瞳

性格 つかみ所がなく飄々としている

階級 1番隊 隊長

仕事 隊の指揮 ギルバート弄り？

武器 剣 杖の中に納刀されている

零の軌跡 設定（後書き）

ルールフラグメ名前だけの別物です。伝説の勇者の伝説とは関係ありません。

オリ主チートにしてみましたかどうでしょうか？
もっとチートにするべきですかね？

因みに後数名PandoraHeartsのキャラ出す予定ですロ
ッティとかロッティとかロッティとか。

今後ともよろしく願いますm（　）m

序章 再開

パンドラ本部 総帥の部屋【ジャック】

『コンコン』

「どうぞ」

ジャックが書類の整理をしているとドアがノックされる。

『ガチャ』

ドアが開かれその方を見ると。

「早い到着だねアキラ」

「依頼が予想以上に早く終わったんでね。それで呼び出した理由は？」

「新しい任務があつてね、君に任せようと思って」

「はあー、ここ二カ月休憩ないんだけど…それにわざわざ呼び出す内容でもないだろ」

笑顔で言うジャックにアキラがため息をつき、呆れていると。

「いやいや、今回はアキラが適任だと思ってね」

「どんな任務だ？ 依頼で無いってことは護衛とかではないんだろ」

「今回は情報収集だよ」

「それなら諜報機関使えばいいだろ、それとも何か隊長クラスじゃないとまずいのか？」

「まあそれもあるんだけどね、今回の任務はクロスベルでの情報収集なんだよ」

「クロスベル…」

最初は疑問に思っていたアキラだがジャックの言葉を聞いて目を伏せてしまう。

「君の戦闘能力、諜報能力はすでにA級遊撃士並みかそれ以上だからね、君に一任することにした」

「…そうか内容は」

「今回の任務は、身食らう蛇の連中がクロスベルで何かやるみたいだからその情報収集することと、4年前の事件を君なりに解決すること」

「なっ！…いいのか？それに身食らう蛇の情報はたしかなのか？」

ジャックが言ったことに驚き質問するアキラ。

「言っただろ君に一任すると、身食らう蛇に関してはそういう噂があるからそれが確かなのか、もしそうなら何をする気なのか調べて欲しいんだ…まあ十中八九至宝関連だと思うけどね」

「了解した、ありがとうジャック。だが…俺は犯人を目の前にして自分を抑えられるか分からないぞ」

アキラは自分の手のひらを見つめながらいう。

「たとえどんな結果でもかまわないよ、アキラが満足できる結果を

得られるならね」

「ジャックにはいくら感謝しても足りないな」

「…それなら女装を「断る!!」」

良い感じの雰囲気をブチ壊すジャックの言葉を即座に拒絶するアキラ。

「きっと似合うと思うんだけどなー」

「うるせーだまれ変態、女だけで飽き足らずとうとう男にも手を出すつもりか、それならギルバートに手を出せ」

「ギルは女装似合わないと思うんだ」

「どうでもいい。そんなことより任務はいつからいけばいいんだ?」
ジャックに振り回されながらも本題に戻す。

「明日だよ、すでにチケットも手配してあるから」

「了解した、隊の方はリー・ライナに一任するから、なにかあれば彼女に言ってくれ」

「リーちゃんね了解、ではアキラ頑張ってね」

「ああ、行ってくる」

そう言うときアキラは部屋を後にした。

「リーンいるかー？」

「アキラ！いつ戻ってきたの」

飛空挺内の休憩所に入るなり声をかけるとリーンと呼ばれた金髪の女性が驚いたようにアキラの方を見る。

「今さっきだよ、それと俺新しい任務に就くことになったから、その間隊長代理頼むな」

「ちょっといくらなんでも急すぎるでしょ」

「すまんが文句ならジャックに言ってくれ、俺も今さっき言われたんだから」

「総帥が？どんな任務か聞いても？」

「身食らう蛇関連だ、何かあれば隊の連中を動かす可能性もあるから一応覚悟しといてくれ」

「了解したわ」

一通り会話が終わり、アキラが椅子にすわると。

「任務には一人でいくの？」

「いやアリシアを連れて行く予定だ…どうした？」

別の女の名前がでた瞬間眉間に少し皺をよせるリーにアキラが問いかける。

「別にーただ隊長お盛んだなーと思っただけですよ」

「なんだ自分が行けないからってすねてるのか、可愛いな」（ニヤ）

「そっそんなじゃないわよ！部屋に戻る」

皮肉を言うがアキラにからかわられ顔を真っ赤にして休憩所を出ていくリーを見て。

「あんまりからかうとリーンが可哀そうですよ」

「アリシア丁度良い所にきたな」

リーが出て行ってすぐ入れ替わるように、青緑がかった黒髪の女性が入ってきた。

「何かあったんですか？」

「クロスベルに身食らう蛇の調査関連の任務で行くことになってな、それでアリシアにも同行して貰おうと思ったんだが…どうだ？」

「行ってもいいんですか！！」（やったーーーー！！）

「あ…ああ、どしたんだそんなに興奮して？」

アキラに同行するように言われ興奮するアリシア。

「えーとですね、ほら…クロスベルってアルカンシエルあるじゃないですか、だから見れるかなーと」（隊長と一緒に嬉しいとか言えない／＼／）

「まあ途中で要人警護の依頼が入って見れるかもしれんがあくまで仕事だからなはきちがえるなよ。それと急で悪いんだが明日の朝クロスベルに向かうから準備いそげよ」

「わかりました。すぐに準備にはいります！では失礼します」
そう言うときアリシアは休憩所を出て行った。

「さてと、俺も準備しなきゃな」
そう呟くとアキラも休憩所を出て行った。

クロスベル行き列車内

「あなた大丈夫」

「うなされておったがどこか具合でもわるいのかね？」
お年寄りの夫婦に心配される青年

「い、いや……ちょっと寝不足でなんだか……変な夢を見ていたみたいだ。」

「ほほう、へんな夢かもしや色っぽい女子どもに迫られてあたふたする夢でも見てたかの」

「いいや……そんな良い夢じゃなかった気が」

「もう、おじいさん。若い人をからかっちゃ駄目ですよ
そうだ、眠気覚ましに冷たいレモレードでもいいかが？凍らせたものを水筒に入れて持ってきているの」

「あ……それじゃ、ありがたく」
飲み物を貰い飲み干す青年。

「ごちそうさま！冷たくて凄く美味しかった」

「ふふ、お粗末さま」

「しかしその格好……帝国人ではなさそうじゃな。やはりクロスベル出身かね？」

「あ、うん。……しばらく外国で暮らしていたんだけど戻ってくる事になったんだ。そういうお爺さんたちもやっぱりクロスベル出身？」

「うむ、共和国方面を旅行してちょうど戻ってきたところじゃよ……しかしそういう事なら今のクロスベルを見たら驚くかもしれないな。」

「そうですね・ここ2、3年で街並みもけっこう変わってしまったて……」

「やっぱり、そうか……実は最近何度か列車でクロスベル市を通り過ぎただけど……ずいぶん背の高い建物が建つようになったみたいだね？」

「うむ、元々クロスベルは大陸有数の貿易都市の一つじゃ。金融業も発達していたため、諸外国からミラが集まりやすい傾向にあったのじゃが……一昨年の《不戦条約》以来その流れが加速したようだな。膨大なミラの投資対象としてデパートやらオフィスビルやらが次々と建てられているのじゃよ。」

「色々便利になったのはいいけど少し目まぐるしくなったわねえ。誰もがみんな」

な、時間とミラ儲けに追われるようになったというか……」

「……………」

「あら、ごめんなさい。せっかく帰って来てくれたのに。悪いことを言ってしまったかしら」

「いや、気にしないでよ。手紙で色々聞いてるし……それにどんなに変わったとしても故郷は故郷だから」

「そう」

「ふむ、若いのに分かつとるのう。それに引き換え、最近の政治家どもときたら……やれ帝国派だの、やれ共和国派だの権利争いばかり繰り広げおって……もはや信賴できるのはマグダエル市長しかおらんわい」

「おじいさん、おじいさん。……ごめんなさいね。この人ときたら、政治の話になるといつも我を忘れてしまつて。」

「いや……勉強になるよ。外国でも《クロスベルタイムズ》は取り寄せていたんだけど……実際に話し聞いてみないと本当のところは分からないから。」

「ほう、お前さんも《クロスベルタイムズ》の愛読者か。多少ミィハーなどところもあるがなかなか良い記事を書く雑誌じゃろ？もう少し自治州行政の問題点に突っ込んで欲しいところじゃが……」

「なるほど……やっぱり色々あるみたいだね。」

『来客の皆様にお伝えします。まもなく、クロスベル自治州、クロスベル市に到着いたします。リベール、レミフェリア各方面への定期飛行船ご利用のお客様はお乗換えください。なお、大陸鉄道公社規約に基づき、当列車はクロスベル駅にて30分ほど停車させていただきます。エレポニア方面に向かわれる方は入国申請書をご記入の上、臨検官への提出をお願いします。』

「隊長そろそろ降りますよ、起きてください」

「はあーうーよく寝た」

アリシアに起こされ大きく伸びをして起きる。

「汗かいてますけど、だいじょうぶですか？」

「すこし変な夢をみてな内容は覚えてないんだが」

心配されてはははっと笑っていると、後ろの方から。

「……ふむ、到着のようじゃの。帝国軍人の顔など見たくもないし、とっと支度をするとうしうか」

「ははっ、そうだね。……（あれから3年か……セシル姉とは何度か導力通信で話してるけど……兄貴、セシル姉、アキラ……俺やっとな帰ってきたよ。クロスベルにみんなで過ごしたあの街に）」

「隊長？」

後ろの席を見て固まっているとアリシアに声をかけられた。

「いやなんでもない」（まさか一緒に列車に乗っているとはな…空の女神もなかなか粹な真似^{エイドス}をしてくれる）

「さて俺たちも降りる準備しようか」

「そうですね」

列車⇒中央広場

「さてと、ここまででいいぞ。就職先に顔を出すんじゃろ？」

「あ、うん…せっかくだから家まで運ばせて貰おうと思ったけど。」

「あらあら、だめですよ。せっかくの初出勤、遅刻でもしたらどうするの？」

「そうそう何事も始めが肝心じゃ。」

「はは確かにそうだね」

そういうと茶髪の青年は手に持っていた荷物を老人に手渡す。

「しかし、戻ってきたばかりで住むアテはあるのかね？東通りでよければ下宿先を紹介できると思うが」

「あ、気持はありがたいけど寮が用意されてるらしいんだ。送った荷物もそちらに届いているはずだよ」

「ほう、そうじゃったか」

「私たちは、東通りの外れの方でくらしているの。何か困ったことがあったらいつでも頼ってらっしゃいな」

「うん、ありがと。落ち着いたら挨拶に伺わせてもらうよ」

「うむ、しつかりとな」

「それじゃあ、またね」

「あれ……あの雑貨ビル……ちゃんと残っていたんだ。たしかクロスベルタイムズが入っていたはずだけど……はは、懐かしいけどこの街並みじゃ浮いてるよな。」

さてと……そろそろ時間だ。」

青年は懷から一枚の封書を取り出しすと。

「特務支援課……警察学校のカリキュラムじゃ聞かなかった名前だけれどまだ制服も受け取ってないしどういう部署なんだろう……？」

——まあいい。とにかく行けば分かるよな。さすがに警察の場所までは変わってないだろうし……よし、初出勤と行きますか！」
気合いを入れて警察に行こうとする。

「隊長、宿ってもう取ってあるんですか？」

「ああ、ジャックがすでに手配してくれてるそうだが、荷物を置き次第市長の所に挨拶に行くぞ。」

後ろから懐かしい声が聞こえ振り返ると：

「っ……アキラ……」

そこには4年前行方不明になり、一昨年死亡認定がされた親友がそこにいた。

髪と目の色が変わっているがそれでも間違うはずがない、意を決して声をかけようとするのと彼と目が合った。すると彼は近づき残り2mほど手前で止まり。

「始めまして：アキラ・ベザリウスといいます。以後お見知りおきを」（ばれてるよな〜？）

「アキラ：今までどこに！？」

アキラに詰め寄ろうとすると手で制止され、アキラがさらに青年に近づき横にくると。

「（やはりこれくらいの変装じゃ無理か……）ロイド：俺が生きている事は誰にも言うな……もし言ったなら：聞いたものを含めて消すぞ」

背筋が凍るような冷たい言葉に思わず冷や汗が出るロイド。

アキラはそれだけ言う通り過ぎていき、後ろにいた黒髪の女性も軽く頭を下げるとアキラの後について行き歓楽街の方に消えていった。

「……アキラ」

二人が去って行った方を見ると小さく呟き、何かを忘れるように頭を振ると、警察に向かった。

二人の物語が動きだした。

似た目的を持った二人はどんな結果を導き出すのだろうか。

序章 再開（後書き）

依頼ー正規の仕事（護衛など）

任務ー裏の仕事（諜報関係）

こんな感じで分けてます・・・どうでもいいですね（笑）

今回登場のオリキャラ

名前 リー・ライナ（愛称リーン）

年齢 18才

身長 165？

容姿 金髪のセミロングで紫の瞳

性格 活発 気配り上手

階級 3番隊副隊長（隊長代理）

仕事 部下の管理

武器 槍（二つ名ー金盞花）

名前 アリシア・フリーユエル
年齢 17才

身長 157?

容姿 黒髪（青緑がかって見える）のロングで腰ぐらいまである、目の色も髪と同じ D・Grayman のリナリー・リーに似ている。

性格 優しく元気 興奮するとテンションが以上に上がる

階級 部隊長（現在アキラの側近）

仕事 4名ほどの部隊の指揮（アキラのサポート）

武器 スナイパーライフル（二つ名「鷹の目」）

飛空艇は各部隊に1機ずつあります。

序章 1日目(前書き)

アリシア容姿変更しました。

D・Graymanのリナリー・リーを元からイメージしてたんですが、それなら茶髪じゃなくて黒髪じゃね…と思ひまして変えた次第です。

移動シーンは徹底的に省きましたすいませんm () m

序章 1日目

歓楽街 ホテル・ミレニウム

「いらっしやいませ。ホテル・ミレニウムへようこそ。お部屋のご予約なら当フロントをご利用ください。」

「パンドラの者です、すでに予約の連絡が入ってると思うのですが」

「しょうしやお待ちください………はい確認が取れました、3階の右側の部屋ですね。こちらが鍵になります」

「どうも」

男性が鍵を渡すとアキラとアリシアは軽く会釈をして階段を上っていく。

「ここだな」

アキラが扉に鍵をさし開けると。

「良い部屋ですねー…あっ！隊長！！」

「どうした？何かあったか？」（盗聴器か！？）

「窓際のベット私でもいいですか！」

「好きにしろ」（人選間違えたかも）

アリシアの言動に少し呆れながらもソファ―に腰掛け鞆から荷物を

取り出して行く。

「隊長凄いですよこのベットすごいフカフカですよ！やっぱ良いとこのホテルは違いますねー！」

「そうだな」

ベットでごろごろしているアリシアをよそに鞆からスーツを取り出し着替えの準備をする。

「隊長…ってなんで服脱いでるんですか！……はっ！まさか…駄目です隊長こんな昼間っからなんて恥ずかしすぎます、隊長がどうしてもって言うなら考えなくてもないですが…ゴニョゴニョ／／／」

「はあゝ俺の話し聞いてなかったのか？市長に挨拶に行くって言っていただろうが」

アキラが服を脱ぎ始めたせいでいらん想像を膨らませて身悶えるように身体をくねくねさせ最後は声が小さくなり胸の前で指をつんつんしていると、アキラがため息をつきこの後の予定を伝える。

「そっそういえばそんなことも言ってましたね……でもそれとこれとは話が別です！目の前に私がいるんですから少しはデリカシーを持ってください」

「今後は気をつけるよ…じゃ俺行ってくるから」

アリシアに注意されるも軽く受け流し片手を上げ部屋を出ようとする。

「もう行くんですか！待ってくださいよー」

「お前は荷ほどこきでもしてろ、市長への挨拶は俺一人で十分だから。何かあればエニグマに連絡しろ」

「えーそんな…」

「隊長命令。じゃ」

アキラが部屋を出ていくと、アリシアは「もー隊長のバカー」と叫び枕をポカポカと叩いていた。

クロスベル市庁舎

「こちらはクロスベル市庁舎の受付となります。本日はどのような御用件でしょうか」

「市長と面会の予約をしていたのですが」

「御名前を伺ってもよろしいですか」

「パンドラ所属のアキラ・ベザリウスといいます」

「……………はい確かに確認いたしました。市長からも通すようにと言われていますので、左手の階段を上がってすぐの扉が市長の執務室になります」

「分かりました」

階段を上がり扉の前で止まり『コンコン』ノックをするとなかから

「どうぞ」

それを聞きアキラが中に入る。

「お初にお目にかかりますパンドラ3番隊長を務めるアキラ・ベザリウスといいます、以後お見知りおきを」

「クロスベル市長のヘンリー・マグダエルだこちらこそよろしくたのむよ……ジャック君から話しは聞いているよ、さあ座ってくれたまえ」

「いえ市長の貴重な時間を割くわけにもいきませんのですぐ帰ります」

「そうかい……聞くところによるとなんでも身食らう蛇とやらがクロスベルで暗躍しようとしているとかなんとか……」

「あくまで噂程度のものですが、もし彼らが何かするのであればクロスベルに被害が及ぶ可能性もあるので念のため調査することになりました」

「そうか……話しは分かったわざわざ顔を出しに来てくれてありがとう。こちら最大限の協力をさせてもらうよ、それと警察と遊撃士には私の方から連絡を入れておくからそちらにも後で顔をだすといい」

「御助力感謝します。それでは失礼します」

頭をさげて部屋から出ようとする。

「ちょっとまってくれ」

市長に呼び止められ振り向くと。

「アキラ君：以前どこかで私と会ったことがないかね？」

「ないはですがもしかしたら要人の護衛中に会っているかもしれない
ませんね」

「そうか、引きとめてすまなかったね」

「いいえ、では私はこれで」

再度頭を下げアキラは執務室を出て行った。

（あの少年……………まさかな）

クロスベル警察本部

「ほお、君がパンドラの雷神かね私は副局長のピエールだ、市長から話は聞いている」

アキラが警察に出向くとピエールといういかにも偉そうな金髪中年が出迎え部屋に案内される。

「はいアキラ・ベザリウスといいます以後お見知りおきを」

「その態度奴にも見習わせたいところだな」

「奴とは？」

「いいやなんでもない、そんなことよりも君のような優秀な人材が来てくれて嬉しいよ。いまクロスベルは猫の手も借りたいぐらいだね。よろしく頼むよ」

そう言いピエールが握手をしようとするがアキラは。

「副局長なにか勘違いされていませんか？…我々がここに来たのはあくまで調査です。警察に協力しに来たわけではありません…護衛の依頼があれば引き受けますがそれも必ずというわけではありません」

「わっ分かってる！それより必ずではないとはどういうことかね？」

「我々にも優先順位というものがありますので状況によっては受け

れないという意味です」

「そ…そうかだが、あの特務支援課とかいうのに比べれば遥かにましだよ」

「特務支援課ですか？」

聞き覚えのない言葉に思わず聞き返してしまう。

0

「ああ、セルゲイが作った課なのだがね、やることが遊撃士のまねごとだと言うんだまったくもってふざけている！」

『ドン！』

ピエールが怒りを露わにし机に拳を叩きつけると。

「君もそう思わんかね？」

「そうですね…市民からの信頼を勝ち取るにはそれ相応の苦勞が強いられるので生半端な覚悟では、むしろ市民の反感を買いかねません」

「そうだろそうだろ…まったくなにを考えているんだ奴は……ブツ
ブツ……ブツブツ……」

その後アキラが開放されたのは1時間後の事である。

「ではなにかあったら言ってくれたまえ、できるだけの強力はしよ

う」

「ありがとうございます、ではこちらも支援課の人間がへまをしないようにできるだけ協力しますよ」

「ふふ、かの雷神にそう言われると少しは気持ちが楽になるよ」

「それは何よりです。本日は貴重な時間を割いていただいてありがとうございました」

「こちらもなかなか有意義な時間を過ごせたよ」↑【愚痴を言っただけ】

「では失礼します」

「ああ、いつでも来てくれたまえきみなら歓迎しよう」

軽く会釈をして部屋をでると。

「あのーすいません」

後ろから呼び止められ振り向くとそこにはピンクブラウンの髪の色をした可愛い女性がたっていた。

「なにか御用ですか？」

「以前何処かでお会いしたことありませんか？」

するとアキラは目を見開き。

「驚いたな……まさか警察内でナンパされるなんて」

「へっ？…ちっ違いますよ！／＼／＼」

女性は慌てて手をブンブン振り否定すると。

「冗談ですよ、あなたが可愛かったのをついからかってしまいました、すいません」

「かつ可愛いって／＼／」

からかったことを謝罪すると女性は軽く頬を赤め下を向いてしまった。

「それと先ほどの件ですが初対面だと思いますよ、私がクロスベルに来たのは今日が初めてなので」

「そうですか…すいません。昔遊んでいた友達に似ていたのでもしかしたらと思ったんですが…」

「その友達とは？」

「4年前行方不明になって一昨年死亡認定されたんですけど、信じられなくて。髪と目の色も違うみたいですし完全に私の勘違いでしたすいません」

そう言い軽く目じりに涙を浮かべ頭を下げる女性。

「……見つかるといいですね」

「はい、ありがとうございます」

「それではこれで」

「あっはい、また会えますか？」

「会えると思いますよ…失礼します」（フランごめん…まだ…）

「はい」

アキラが警察を出ていくとその背中を女性が嬉しそうに見つめていた。

（あっ！名前聞き忘れちゃった！？）

遊撃士協会

「失礼します」

アキラが遊撃士協会に入ると。

「はーいってアキラじゃない！久しぶりね、市長の言ってたパンドラの人間ってあなただったのね」

「久しぶりですねミシェルさん元気そうでなによりです」

「相変わらずの猫かぶりね、いい加減やめたら似合っていないわよ…ブップ」 (笑)

「あんたも全く変わらん、年上に対して敬意を払うのは普通のことだろ」

ミシェルが必死に笑いこらえながら言うときアキラも諦めて素に戻る。

「ごめんなさい…ププ」 (笑)

「もういい…市長からは何処まで聞いているんだ？」

「パンドラの人間がこちらに来るから、できる限り協力してほしいって言ってたわね」

「そうか…今回俺がクロスベルに来た理由は身食らう蛇関連だ」

「身食らう蛇！」

アキラの言葉に驚きを隠せないミシェル。

「あくまで噂だよ、なにか会ってからでは遅いからな、事前に調査しておこうって魂胆だ」

「そう：それならこちらでもできる限り協力するわよ、なにかすることはある？」

「今のところは特にないよ、なにかあればこちらから連絡するから、そっちも何か情報を掴んだら教えてくれ」

「分かったわ」

「それじゃ俺はこれで失礼する」

「あらもう行くの？もう少しいいのに」

「まだ行くところが残ってるんでね：じゃまた」

「ええまた」

アキラは軽くミシェルに手を振ると遊撃士協会を後にした。

特務支援課

「ふう……いい風が吹いてるな。〈ベルハイム〉……そっかここからみえるのか。はは……今はもう別の人が入ってるんだよな。セシル姉の実家はさすがに残ってるだろうけど……そうだ、おばさんたちにも後で挨拶しておかないと……」

「（あれから3年……叔父さん家で厄介になった後警察学校に入っ
て……がむしやらに勉強と訓練をして捜査官の資格も取ったけど……
結局俺は……俺は……捜査官になって何がしたかったんだ……？）
」

『タン』

後ろから物音が聞こえ振り返って見ると。

「アキラ！……どうして……」

「少し話しておくことがあってな」

「話すこと？……そんなことより今まで何処にいたんだ！それに朝のあれはなんだよ！」

ロイドが少し興奮気味にアキラを問い詰めるように言う。

「事件の後パンドラに保護されていた、それに朝の件は言葉の通りだ。レイテさんやセシルさんウェンディやオスカーにも言うな、巻き込まれてもしらんぞ」

「パンドラ！それに保護ってなんだよ…しかも巻き込まれるって何する気なんだよ」

「あの当時、犯人の顔を見てたのは俺だけだ、そして俺が生きてると分かれば殺そうとするのは当然だろ、だから保護して貰った。そして俺を殺し損ねた犯人はクロスベルにいる…ここまで言えばわかるだろ」

「まさか……」

「俺がクロスベルに帰ってきて、4年前の事件を調べていると知ればまた殺そうとするだろう。その時に親しい人間を人質に取られると面倒だからな…それに俺が犯人を見つける前に正体が相手にバレて後手に回るなんてごめんだ」

「一つ聞いてもいいか？」

「なんだ？」

「犯人を見つけてどうするつもりなんだ？」

ロイドが真剣な目つきで真っ直ぐアキラの目を見る、するとアキラもロイドの目を見て。

「証拠を掴んで警察に連れて行き裁きを受けてもらう」

「ほんとか!？」

「ほんとだ、殺してやりたいがそうすれば奴らと同じだからな」

「そうか……よかった」

「……………」

ロイドが安堵すると黙ったまま見つめるアキラ。

「俺はてっきりアキラが犯人に復讐するために戻ってきたもんだと思ってた」

「もしそうだとしてもお前が止めてくれるんだろ」

「当たり前だ!」

「そうか……今日はここまでだな。また今度ゆっくり話でもしよう」

「分かった、またな」

振り返り帰ろうとすると途中で足を止め振り返り。

「ロイド……なんだ?」 特務支援課……がんばれよ」

「ああ、がんばるよ」

今度は振り返らずに階段を上がっていくと二人の少年とすれ違った

「（ロイドの知り合いか？まあいい……。それよりも…当たり前か……俺は必ず復讐する……。ロイド…お前に俺が止められるか？）」

アキラは含み笑いを浮かべてホテルへと帰って行った。

ホテル・ミレニアム

『ガチャ』

アキラが部屋に入ると・

「隊長！市長に挨拶に行くだけでどうしてこんな時間になるんです
が説明してください」

部屋に入るなり少し怒り気味のアリシアが迫りながら聞いてくる。

「市長に挨拶した後、警察や遊撃士の方にも挨拶に行ってたんだよ」

「どうして一度戻るって選択肢がないんですか！」

「お前いつも荷ほどきに時間かかるから気を使ったんだよ…てからイフルの整備してたのか」

「今日は早めに終わらしたんです、…隊長と出かけようと思って…」
そう言うとソファアに戻り整備を再開しだす。

「悪かったよ…今度一日付き合ってやるから」

「ほんとですか？」

少し疑いながら聞いてくる。

「ほんとだよ」

「ならゆるします」

アリシアの言葉を聞きアキラが隣に座ると、アリシアは嬉しそうに小さく鼻歌を歌いながら整備続けた。

「なあアリシア」

「なんですか」

武器の整備が終わり名前を呼ぶと。

『ギュ』

「たっ隊長！」

いきなり抱きしめられ慌てるアリシア。

「今晚どうだ？」

そのままアリシアをソファ―に押し倒す。

「まっまだ心の準備が…」

「……………」

「隊長」

「……………」

「隊長？」

「……Z Z Z……Z Z Z……Z Z Z」

「えっ!?!…まさか……」

自分の肩辺りにあるアキラの顔を見ると安らかに眠っていた。

「寝ます!?!…普通寝ますか!?!…このタイミングで!?!……
……もうしょうがないな……あれ!?!」

アキラを起こさないように起きようとしたが、かなり強く抱きしめられてるため身動きとれない状況に。

「ちよっ……もういいや……Z Z Z」

こうしてクロスベルにきて最初の1日は終わった。

序章 1日目（後書き）

いろいろな人に疑われまくりのアキラ君でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8273x/>

零の軌跡 過去を追う者

2011年11月18日22時54分発行